

コペンハーゲンの水辺都市開発の日本に於ける可能性についての研究

代表 池田 靖史（慶應義塾大学 政策・メディア研究科 教授）

委員 小林 博人（慶應義塾大学 政策・メディア研究科 准教授）

委員 和田 菜穂子（東北芸術工科大学 教養教育センター 准教授）

〔研究報告要旨〕

デンマークの首都コペンハーゲンは、水辺空間が美しい街として知られている。「世界一幸福な国」といわれているだけあり、人々の生活レベルは高く、豊かに暮らしている。暮らしやすさという点においては、福祉などの社会制度の充実も大きく関係しているが、都市構造の基盤というハード面が確立されている点においても、世界有数の都市計画成功事例に挙げられるだろう。

過去の歴史を振り返ると、コペンハーゲンの街の構造は、中世における人工カナルの形成と街づくりに原点があった。当時、オランダのアムステルダムから土木の専門家が招かれ、人工カナルを中心とした宅地開発と街づくりが行われた。デンマークという国がオランダと同様平らな地形で、資源に乏しい農業国であったことも背景にあり、都市づくりと環境保全は切り離せない状況にあった。その結果、コペンハーゲンは「水の都」ともいうべき、美しい水辺空間をもつ環境共生型の都市が形成されたのである。

我が国では近年、東京など首都圏における臨海部の都市再開発計画が進められているが、親水性のある良好な住環境は果たして有効に利用されているのだろうか。水は人々の生活において、昔から必要不可欠な資源として扱われてきた。特に日本は世界有数の生活用水使用国であるが、それは河川が多く、豊かな水資源に囲まれた地理的環境からきている。

本研究では東京とコペンハーゲンというふたつの都市における水辺空間の開発の歴史と宅地の形成過程の比較を行う。都市計画的な視座からの都市景観に関する比較研究である。現地調査を踏まえ、生活に密着した水辺空間の利用および住環境について考察を行った。その結果コペンハーゲンには東京には無い水面に近い生活空間が多様に存在する事が見て取れたが、それは水辺の文化の伝統を現在も継承し生活の一部になっている事だと考察した。